天才の国

作　折田

登場人物

セン	病気の女の子
フウくん	病気の男の子
シキちゃん	病気の女の子
ノア	病気の女の子
メカ	病気の男の子
先生	みんなの病気を治療するための先生
看護婦	先生の助手
母親	センの母親
その他病気の子供達	多数

シーン6の(※)〜(※)内は役者同士の判断によっては飛ばして構わない。

その他、多数の病気のこどもたちを登場させる場合、本筋を邪魔しない程度ならある程度キャラクター像をつくり、自由に動いても構わない。

1　墓地

雨中、喪服の人間が集まっている。
セン、ぼんやりお墓を見つめている。
センの母親、センに近づく。

母親　「セン」
セン　「お母さん」
母親　「悲しくないのかい。父さん、二度と帰ってこないんだよ」
セン　「帰ってこない」
母親　「二度と会えないってことだよ」
セン　「どうして？」
母親　「死んだってことなんだよ」
セン　「死んだ？」

間。

セン　「死んだ……」
母親　「死ぬってことは、悲しいってことなんたよ」
セン　「悲しい……」
母親　「セン。母さんね、センのこと、愛してるわ」
セン　「愛してる？」
母親　「とっても大好きってことだよ」
セン　「大好き……。わたしも、お母さんのこと大好きよ」
母親　「セン。あなたはね、病気なの」
セン　「病気？」
母親　「だからね、病院で治してもらわなくちゃいけないんだよ」
セン　「病院……」
母親　「しばらくね、離れて暮らさなくちゃいけないんだよ。我慢出来るね？」
セン　「離れて、暮らさなくちゃ？」
母親　「会えないってことだよ」
セン　「死んだってこと？」
母親　「いいや、少しの間、会えないだけなんだよ。センが病気を治したら、きっとまた一緒に暮らせる。セン。母さんは、センを愛しているからね」
セン　「私は、病気？」
母親　「ああ。しっかり治して、帰っておいで。離れていても、大好きだからね」

間。

セン　「私は、病気」

舞台に白衣の男(先生)と看護婦姿の女が登場。
少し離れたところでセンを見ている。
タイトル『天才の国』
暗転。

2　病院

明かりがつく。
チャイムが鳴る。
子供たちの声や足音で騒がしくなる。
セン、登場。
その反対側から白衣の男(先生)が登場。センを見つけ近づく。

先生　「やあ、セン。調子はどうかな。授業、真面目に受けてるって聞いたよ。えらいね」
セン　「先生」
先生　「まだまだ慣れないだろうけど、不便なことはないかな」
セン　「不便なこと？」
先生　「あれがしたいのに出来ないだとか、何か、欲しいものがあったりだとかは？」
セン　「それは、ないです」
先生　「そうかそうか」
セン　「先生、あれは何ですか？」
先生　「ああ、カメラだよ。センたちに何かあったらすぐ駆けつけられるようにつけてるんだ。あんまり気にしなくて大丈夫だよ」
セン　「わかりました」
先生　「うんうん。センは良い子だから、きっと早く帰れるね」
セン　「はい」
先生　「お母さんが恋しくなったりは、しないかい？」
セン　「恋しくなったり？」
先生　「会いたいなって思わないかい？」
セン　「うん。ちょっと、会いたい」
先生　「ハハハハ。ちょっとか」

セン　「ここは、本当に病院なんですか？」
先生　「どうして？」
セン　「学校みたいだから」
先生　「そうだね。病院だけど、何ていうか、病気を治すための学校なんだよ」
セン　「病気の、学校……」
先生　「授業は難しくないかい？」
セン　「はい」
先生　「センは賢いね。授業は病気を治すために大事なことばかりだから、しっかり聞いておくんだよ。そうしたら、ちょっとだけ会いたいお母さんにも、すぐ会えるさ」
セン　「はい」
先生　「よし」
フウくん声　「と、白衣姿の男は満足そうに頷いた。視線の先にいるのは、最近この病院にやってきた少女」

と呟きながらフウくんが登場。

フウくん　「このときの少女はまだ知らなかった。まさか自分が、この白衣の男と恋に落ち、命までをも落とすことになるとは……」
セン　「命までをも？」
先生　「フウ。ダメじゃないか」
フウくん　「うっ、しまった、つい」

看護婦、慌てた様子で登場。

看護婦　「フウくん」
先生　「目を離したね？」
看護婦　「す、すみません」
先生　「彼は今が大事な時期なんだ。病気が治るかどうか、ここで決まるんだよ」
看護婦　「はい」
先生　「少しでも気を抜かないように。(フウに)そう言うことは口にしちゃダメって、先生、何度も言っているよね？」
フウくん　「でも、頭に溢れて止まらなくって、気がついたら口に出しちゃうんだ」
先生　「かわいそうに。フウ、きみの病気は治る気配がないどころか、ますます進行してるようだ」
看護婦　「頑張って治しましょうね。私ももっと頑張るわ」

フウくん　「うん」
先生　「大丈夫。先生が治してみせるさ、そのための病院だ」
フウくん　「でも、これ、本当に治るの？」
先生　「もちろん。はやく治して、はやくおばあちゃんに会わなくちゃね」
フウくん　「うん。ぼく、頑張るよ」
看護婦　「その調子よ」
セン　「フウ」
フウくん　「え？　あ。最近来た子だよね？」
先生　「センだよ。明日から一緒に授業受けてもらうから、仲良くね」
看護婦　「センちゃん、初対面で急に呼び捨ては良くないんじゃないかな？」
セン　「ごめんなさい」
フウくん　「ぼく気にしないよ。よろしくね、セン」
セン　「フウは、おばあちゃんに会いたいの？」
フウくん　「そうだよ。ぼく、お父さんもお母さんもいないから、おばあちゃんが育ててくれたんだ」
セン　「それは、悲しいこと？」
フウくん　「ちっとも。ぼく、おばあちゃん大好きだもん。だから、はやく病気を治して、はやく帰りたいんだ」
セン　「そっか」
看護婦　「フウくんはセンちゃんより随分長くいるから、分からないことがあれば聞くといいわ。フウくん、色々教えてあげてね」
フウくん　「うん。セン、何でも聞いて良いからね」
セン　「ありがとう」
看護婦　「じゃあ、フウくん。そろそろ戻りましょう」
フウくん　「うん。セン、またね」
セン　「またね」
先生　「今日の治療もしっかり励むんだよ」

看護婦とフウくん、舞台から退場。
先生、２人を見送ったあとセンを見る。

先生　「何か困ったことがあれば職員室に来るんだよ」
セン　「はい」
先生　「良い子だ」

先生、退場。

ノア声　「センちゃん」

ノア登場。

セン　「ノア」
ノア　「え、もう覚えてくれたんだ、嬉しい。ねえ、先生と何話してたの？」
セン　「困ったことがあったら、すぐに言うんだよって」
ノア　「そっか。先生、優しいもんね」
セン　「優しい……」
ノア　「あ、もちろん私にも相談していいからね」
セン　「うん」
メカ声　「ノア」
ノア　「すぐ行く。ねえ、センちゃんも鬼ごっこしない？」
セン　「鬼ごっこ？」
ノア　「中庭でやるんだ。一緒に行こうよ」
セン　「うん」
ノア　「(メカに)センちゃんもするって」
メカ声　「センって誰だよ」
ノア　「(メカに)最近来た子だよ。(センに)行こ」
セン　「うん」
ノア　「センちゃん、まだまだ知らない子多いと思うから、みんなのこと紹介するね(と話しながら退場)」

ノア、セン退場。

3　病院(数週間後)

フウくん、セン、舞台に登場。

フウくん　「タツくんとは話した？　話し方っていうのかな、なんか独特だよね」
セン　「会ったことないと思う」
フウくん　「そっか。クラスが違うと、あんまりお喋りできないもんね。すごく面白くて、ぼく大好きなんだ」
セン　「会ってみたいな」
フウくん　「うん。でも、クラスが違うからなあ」
セン　「違うとダメなの？」
フウくん　「まあね。同じような病気どうしが一緒にいるとね、症状が悪化するんだ

って。だからクラスを離してるから、あんまり、他のクラスの子とは関っちゃいけないって」

セン「そうなんだ」

フウくん「タツくんとは、集会のときに一回だけね、お話出来たんだよ」

セン「集会？」

フウくん「そう。先生が、色々お話してくれるんだよ。退院が決まった子のことと か、病気の歴史とか、治療の大変さとか、色々ね。先生って意外と泣き虫 でさ、この前もルーコが退院したこと、集会で話してくれたとき、すごい 泣いててみんなで笑っちゃった」

セン「ルーコ？」

フウくん「ルーコはね、ぼくよりずっと遅くにきたのに、もう病気が治ったんだよ。 症状が軽かったんだって」

セン「そうなんだ」

フウくん「ぼくもっと頑張らなきゃ。センも頑張ろうね」

セン「うん」

フウくん「センはどんな治療をしてるの？　痛い？」

セン「ううん。授業以外は何にも」

フウくん「ぼく、最近は毎日治療してるんだ。治りかけの証拠なんだって」

セン「痛いの？」

フウくん「全然。あのね、ずっと口を閉じてるんだよ」

セン「口を？」

フウくん「うん。目の前に絵があってね……」

先生、登場。

先生「やあ、すっかり仲良しだね」

フウくん「先生」

先生「フウ、もうすぐ治療の時間だからね」

フウくん「うん」

先生「セン、調子はどうかな？　もう随分慣れたんじゃない？」

セン「はい」

先生「そろそろセンも治療に入っていい頃かもしれないね。なあに、心配いらな いよ。痛いことはしないから」

フウくん「大丈夫だよ。先生、すごい優しいから」

セン「うん」

先生　「それじゃあ行こうか。（センに）向こうでノアたちが遊んでいたよ。混ざってくるといい」
セン　「はい」
先生　「良い子だ。（フウくんに）さあ」

先生、フウくん、退場。
セン、退場。

ノア声　「パイナップル」
子供たち声　「さいしょはぐー。じゃんけんポン」
ノア声　「チョコレイト（といいながら舞台に登場）」
子供たち声　「さいしょはぐー。じゃんけんポン」
ノア　「パイナップル。ゴール」

シキちゃん、メカらが登場。

メカ　「まじで勝てねえ」
シキちゃん　「強すぎるよお。手加減してよお」
ノア　「手加減って言われてもな」

セン、登場。

ノア　「あっ、センちゃん」
セン　「鬼ごっこ？」
シキちゃん　「ううん。グリコ」
セン　「グリコ？」
メカ　「おう。ゴールとスタート地点を決めるだろ？　じゃんけんするだろ？　で、例えばグーで勝ったら、グリコでゴールに向かって3歩進める。チョキで勝ったら、チョコレイトで6歩、パーならパイナップルで6歩」
ノア　「センちゃん入れてもう一回しようよ」
シキちゃん　「え〜、やだよ。またノアが勝つもん」
セン　「じゃんけん強いの？」
メカ　「強いなんてもんじゃねえよ。オレなんて百回に1回しか勝てないね」
シキちゃん　「それはメカが弱すぎ」
セン　「コツがあるの？」

ノア　「うーん、説明難しいけど。ほら、じゃんけんって、グーかチョキかパーしかないでしょ？」
セン　「うん」
ノア　「だから(言い切る)」
セン　「へえ……」
メカ　「な？　わかんないだろ？」
シキちゃん　「かくれんぼしようよ」
メカ　「いいぜ。どうせノアは鬼にならねえだろうけど」
ノア　「どうだか」
シキちゃん　「さっきビリだったメカが鬼やってよ」
メカ　「え～、グリコ関係あんのかよお」
セン　「ねえ、かくれんぼって？」
シキちゃん　「え？　したことないの？」
メカ　「鬼が目え瞑って十秒数える間に他の奴らが隠れる。鬼はそれを探すんだ」
セン　「鬼しようか？」
ノア　「いいの？」
セン　「うん」
シキちゃん　「声に出して十秒数えてね」
セン　「わかった」

セン、壁に顔を向けて目を瞑り、いーち、にーい、と数えはじめる。
3人、慌てて隠れる。そのまま退場。
セン、数え終わる。

子供声　「もーいいよー」

セン、みんなを探しながら、退場。
看護婦、登場。
看護婦、カルテに何かを書き込んでから、すぐに退場。

4　中庭(数日後)

セン、フウくんがスケッチブックとクレヨンを持って登場。

フウくん　「この辺りにしよっか」
セン　「うん」
フウくん　「ぼくね、この授業好きじゃないんだ」

セン　「そうなんだ」
フウくん　「センは好き？」
セン　「分からない。ここに来る前は絵を描いたことなかったから」
フウくん　「え、描いたことなかったの？　ちょっとも？」
セン　「ちょっとも」
フウくん　「ぼく、おばあちゃんの似顔絵ならいっぱい描いてたよ。喜んでくれるから、嬉しかったんだ」
セン　「そっか。……じゃあ、おばあちゃんを描いたら？」
フウくん　「え？」
セン　「そうしたら、楽しいんじゃないかな」
フウくん　「あはは、中庭にあるものしか描いちゃダメだよ。ぼく、もう全部描いちゃったな……」
セン　「フウは、どのくらいいるの？」
フウくん　「ずっとだよ。でも、もうすぐ治るって。おばあちゃんに会えるって先生が言ってた」
セン　「そうなんだ。良かったね」
フウくん　「うん」
セン　「じゃあ、今日描いたものを、おばあちゃんにあげたら？」
フウくん　「うわあ、いいね。おばあちゃん、喜んでくれるかな」
セン　「喜ぶんじゃないかな」
フウくん　「何にしよう。センは何描くの？」
セン　「お花」
フウくん　「そっかあ。じゃあぼくは、空にしようっと」
セン　「空？」
フウくん　「うん。あ、見て、あの雲。女の人の横顔みたいだ」
セン　「そうかな」
フウくん　「そうだよ。何だか少し悲しそうだから、きっとさっき恋人に振られたんだよ。あ、耳についているのは真珠のピアスかな？　多分、振られた恋人にもらったものだよ。あっ、真珠が消えた。持っていると辛くなるから外したんだ。高かっただろうになあ、あの辺りは雲がないから、きっと海だね。海に投げちゃったんだよ、ポイってさ」
セン　「フフフ」
フウくん　「あっ、ぼくまだ病気が……」
セン　「楽しい」
フウくん　「え？」
セン　「フフフ」

フウくん　「絵描かなきゃね」
セン　「うん」

2人、絵を描く。
シキちゃん、スケッチブックに絵を描きながら登場。
センとフウくん、シキちゃんの様子を見つめている。

フウくん　「シキちゃんだ。何描くんだろ」
セン　「あれじゃ転けちゃう」
フウくん　「え？」

シキちゃん、転げてスケッチブックを落とす。
センとフウくん、シキちゃんに駆け寄る。

シキちゃん　「あー……」
フウくん　「大丈夫？」
シキちゃん　「うん、平気」
フウくん　「(スケッチブックを見て)うわ、それ何？」
シキちゃん　「え。えっとね、鳥」
フウくん　「鳥？」

斬新で先鋭的な絵が描かれている。

フウくん　「……には見えないけど、ぼくは好きだよ。なんか、こう、グアッサって感じがする」
シキちゃん　「ありがとう」
フウくん　「ねえ、センも見てよ」
セン　「うん。ここが羽？」
シキちゃん　「そう、一応。うん、でも、言葉にしちゃうと嫌だな」
セン　「ごめんなさい」
シキちゃん　「あっ、違うの、私がごめん。絵ってさ、これがこうだとか、言葉になっちゃうと、うーん。なんていうか、ここで受け止めるっていうか」
フウくん　「ここ？」
シキちゃん　「言葉に閉じ込めちゃうと、味気ないでしょ。だから、これは羽だけど、羽じゃないっていうか」
セン　「よく分からないけど、絵が好きなんだね」

シキちゃん　「え。……うん」
フウくん　「そう微笑む少女の顔は花の如く綻んでいる。本当に絵が好きなのだろう。少女の握るスケッチブックのなかで、絵の鳥が鳴いている気配さえしてくるようである」
シキちゃん　「ウフフ。何それ」
フウくん　「あ、ぼく……」
セン　「私、フウの病気好き」
シキちゃん　「私も」
フウくん　「ありがとう」

看護婦、登場。
看護婦、険しい顔つきでシキちゃんへと近付き、スケッチブックを奪い取る。

看護婦　「まあ、またこんなものを描いたのね」
シキちゃん　「あ……」
看護婦　「シキちゃん、あなたますます病気が進行しているわ。（フウくんに）ねえ、絵を見せて」
フウくん　「あ、ぼく、今日はまだ」
看護婦　「今日のじゃなくて良いから」

フウくん、スケッチブックを捲って看護婦に渡す。

看護婦　「（受け取り）ほら、見て。シキちゃんが描かなきゃいけないのは、こういう絵よ。素晴らしいでしょ。シキちゃん、あなたの絵はね、病気なのよ」
シキちゃん　「はい……」
フウくん　「でもぼくは、シキの絵、好きだよ」
看護婦　「フウくん、あのね。にんじんやピーマンみたいな、好き嫌いの問題じゃないの。これは病気だから、治さなくちゃいけないことなの。教科書で習ったでしょう？　ねえ、センちゃん、覚えてる？」
セン　「あの、ピカソ？」
看護婦　「そう。ピカソも、ゴッホも、シキちゃんと同じ病気だったの。大丈夫よ、シキちゃんはまだ間に合うわ、末期じゃないから。治していきましょう。はやくお家に帰りたいわよね？」
シキちゃん　「うん。帰りたい」
看護婦　「フウくんも」
フウくん　「うん」

看護婦　「じゃ、2人は続き描いていてね。シキちゃん、先生のところに行きましょう」

シキちゃん　「(頷く)」

看護婦、シキちゃん、退場。

フウくん、セン、2人を見送る。

フウくん　「……病気って、そんなに悪いことなのかな」

セン　「分からない」

フウくん　「……ぼくも、ずっと分からないんだ……」

沈黙。

フウくん　「絵、描かなきゃね」

セン　「うん」

2人、先ほどの場所に戻り、座ろうとする。

フウくん、その場にゲジゲジを見つける。

フウくん　「あっ、ゲジゲジだ」

セン　「え?」

フウくん　「ほら」

セン　「気持ち悪い」

フウくん　「アハハ。他の場所で描こ」

セン　「うん」

フウくん、退場。

セン、ゲジゲジを見る。

セン　「気持ち悪い」

ゲジゲジを踏み潰す。

潰れた死骸を確認してから、セン、退場。

5　病院　外(数日後)

メカ、登場。終始あたりをキョロキョロしている。

メカ　「(声を抑え)おーい、良いぞー」

シキちゃんが登場。

シキちゃん　「(声を抑え)オッケー」

ノア登場。

ノア　「(声を抑え)良いよ、おいで」

シキちゃん　「へ？」

センとフウくんが登場。

メカ　「え、いつの間に？」

ノア　「今の間に」

フウくん　「何してるの？」

シキちゃん　「探索ごっこ。今から秘密基地に行くの」

メカ　「ちぇっ、ちぇっ。仕方ねえなあ。じゃ、今日から5人の秘密基地な」

セン　「どこにあるの？」

シキちゃん　「フェンスの向こう側」

フウくん　「え、外？」

ノア　「近いからすぐ帰って来られるんだよ。フェンスの下の方がね、ベローンってなっててて、そこから行けるの」

メカ　「オレが見つけたんだ」

セン　「へえ……」

メカ　「なんだお前、興味ないなら来なくて良いぞ」

シキちゃん　「意地悪言わないでよ。センちゃんも行こ」

セン　「うん」

メカ　「仕方ねえなあ。ついてこいよ」

フウくん　「うわあ、ドキドキする」

ノア　「先生たちには絶対ナイショね」

セン　「でもカメラは？」

メカ　「監視カメラの配置ぐらい頭入ってるよ。ヨユー。で、今来たルート死角な。このルート以外ヤバいから気をつけろよ」

フウくん　「分かった。うわあ、秘密のミッションみたい」

メカを先頭に5人、退場。
再びメカを先頭に順番に登場。

フウくん　「あ、ガラスが落ちてる」
ノア　「気をつけてね」
フウくん　「うん。なんだったんだろう、お酒のビンかな？　酔っぱらいがお酒のビンを投げちゃったんだ。他に破片がないから、一ヶ所だけ欠けちゃったんだね、それで、我にかえって、投げたお酒のビンはちゃんと持って帰ったんだよきっと。お酒はたくさんこぼれたんだろうなあ、でももうすっかり乾いてる」
シキちゃん　「アハハ、フウくんの病気っていつ聞いても面白いよね」
フウくん　「また先生に怒られちゃう」
メカ　「ここには先生いないぜ」
ノア　「ついたよ」
フウ　「ここが秘密基地なの？」
シキちゃん　「うん。鍵が壊れてるから勝手に入ってるの」
セン　「怒られない？」
メカ　「大丈夫。誰も来ないから」

5人、秘密基地へと入る。
秘密基地には古びた絵画や彫刻が並び、本棚や小さなソファーもある。
本棚には本、束ねられた論文などが入っている。紙はかなり古く脆い様子。

フウくん　「う、ちょっと怖いね」
ノア　「慣れちゃえば平気だよ」
セン　「(壁にかかっている絵を見て)ねえ、これ」
シキちゃん　「うん、私と同じ病気の人が描いた絵みたい」
フウくん　「(彫刻を見て)ねえ、あれは？」
メカ　「あれも病人がつくったやつだよ。ここにあるものは、全部そうだと思う」
セン　「そうなんだ」
フウくん　「ぼく、好きだけどな」
ノア　「うん」
シキちゃん　「でも、病気だから」
フウくん　「(本棚から本を取り出し捲りながら)これも、病気なのかな」
ノア　「うん、それは私と同じ病気の人だと思う。ここにある本ね、ぜんぶなんだよ」

フウくん　「数字と変な記号ばっかりだ。ぼく、お話の方が好きだな」
ノア　「いっぱい読んでたらね、その記号の使い方も分かってきたんだ。同じ病気だからかも」
フウくん　「へえ……ぼく、分からないや。算数、嫌いだし」
ノア　「ええ、数ってね、すごい面白いんだよ。でも病気だから、考えちゃダメなんだって」
セン　「病気って、そんなにいけないことなのかな」
シキちゃん　「え？」
セン　「この絵も、こんなに楽しいのに」
フウくん　「うん。心が、ギュッてなる」
ノア　「ギュッてなるのは、病気の人が描いたから……ギュッてなっちゃ、ダメなんだよ」
メカ　「でも変なんだぜ(本棚に体重を預け)」
セン　「え？」
メカ　「病気の絵なのに、丁寧に額縁に飾ってんだもん」
セン　「額縁」
シキちゃん　「ほら、このまわりの枠だよ」
ノア　「絵を守ってる感じがしない？」
フウくん　「うん。絵の一部って気がする。これも病気の人が絵にくっつけたのかな」
メカ　「かもな。だったらそれも、病気の産物だな」
セン　「産物(メカを見て)あ、メカ」
メカ　「ん？(本棚がずれて)うお」

本棚がずれ、壁から少し離れる。

メカ　「びっくったあ」
ノア　「やめてよお」
メカ　「ごめんって。戻すの手伝ってくれ」
フウくん　「ぼくやるよ。メカ、そっち押してね」
メカ　「おう」
ノア　「ゆっくり、ゆっくりね」
フウくん　「せいの」

押す。本棚の裏から、ガコン、と何かが落ちたような音がなる。

シキちゃん　「なんか落ちたんじゃない？」

メカ　「(裏を見て)なんかある。フウ、本棚前にするぞ」
フウくん　「うん。せいの」

メカとフウくん、本棚を前にずらす。

メカ　「(拾い)あった」
シキちゃん　「それ何？」
メカ　「う～ん。あ」

メカ、シキちゃんに拾ったもの(ラジカセテープ)を渡し、舞台袖へ。

フウくん　「どうしたの？」
メカ声　「おーう」
ノア　「答えになってないよお」
セン　「これ、ラジカセのテープじゃない？」
シキちゃん　「ラジカセ？」
セン　「うん。お父さんが持ってた。とっても珍しいものだって」
フウくん　「本で読んだことある。人の声が聞こえてくる機械なんだよ」
ノア　「これ、電話なの？」
フウくん　「ううん。電話で、録音って出来るでしょ？　ラジカセは、録音した声を流すための機械なんだよ」
シキちゃん　「なあにそれ」
フウくん　「もう要らないからって、ずっとずっと昔に、なくなっちゃったんだって」
ノア　「かわいそうだね」

メカ、ラジカセ本体を持って戻ってくる。

メカ　「ほら、ここの形とさ、ピッタリ合うだろ？」
ノア　「ほんとだ。メカすごい」
メカ　「貸して」

ラジカセにテープをセットし再生ボタンを押すが何も流れない。

シキちゃん　「壊れてるのかな」
メカ　「ちょっと待って。電池ない？」
ノア　「電池？　えー」

メカ退場し、スプーン、ゴム手袋、食塩水(容器に入れて)、キッチンペーパー、コードを持って登場する。

シキちゃん　「ああメカ、先生に怒られちゃうよ」
メカ　「ここには先生いないから」

メカ、ゴム手袋をしてからコードをラジカセの内部に繋ぎ、簡易電池を作る。
メカ、再生ボタンを押す。
ラジカセにノイズが走る。

5人　「おお」
フウくん　「すごい。どうやったの？」
メカ　「どうって言われてもな。ここに来る前は、好きでいろいろ触ってたんだ。じゃあ病気だって言われたわけだけど」
シキちゃん　「メカはねえ、すごいんだよ。前にもね、先生のパソコン壊れたとき直してたもんね」
ノア　「先生が目を離した一瞬の隙で直してたもんね」
メカ　「病気が悪化するだろってめちゃくちゃ怒られた」
ノア　「なんか聞こえてきた」
ラジカセ声　「(ノイズでほとんど聞き取れない)天才は病気じゃない。その才能を恐れてはならない……。私ももうすぐ死ぬだろう。私に代わり、天才を、才能を守る人間が必要だ」
フウくん　「人の声、入ってるのかな」
ノア　「っぽいのは入ってるけど、何言ってるかわかんなくてつまんないね。メカ、なんとかしてよ」
メカ　「ええ、さすがに無理だよ。管理室に行けば直せる機会とかありそうだけど、絶対入れないし」
セン　「管理室？」
シキちゃん　「病院の一番上にある部屋だよ。監視カメラとか、そこで管理してるんだって。私たちは絶対入っちゃいけないんだけど、メカが一回入ろうとして」
メカ　「めちゃくちゃ怒られた」
ノア　「よくやるよね」
メカ　「あ、おい、なんか言ってる」
ラジカセ声　「彼らは病気などではない、天から与えられた才を、私たち凡人が潰して良いわけがないのだ。歴史に飲まれ葬り去られた事実と言うのは残酷である。この国は」

フウくん　「人の声とはわかるけど、内容は全然分かんないね」
セン　「うん。でも」

じっとラジカセに耳を澄ませる5人。

ラジカセ声　「天才は病気じゃない……その才能を恐れてはならない……」
セン　「天才は……」

5人の姿を残し、暗転。

6

病院(数日後)
明かりがつく。
フウくん、落ち込んだ様子で座っている。
そこにノアとセンが登場。

ノア　「グリコ」
セン　「鬼ごっこ」
ノア　「センちゃんそれ自分が得意だからでしょ」
セン　「うん」
ノア　「すごいよね。なんであんなにずっと走れるの？　私すぐに疲れちゃう」
セン　「ノアは呼吸が下手だと思う」
ノア　「何それ。息するのにうまいも下手もないよ」
セン　「フウ」
ノア　「どうしたの？」
フウくん　「うん」
ノア　「お腹痛いの？」
フウくん　「ううん」
ノア　「先生呼んでこよっか？」
フウくん　「ううん。あのね、おばあちゃんがね、病気なんだって」
セン　「じゃあ、おばあちゃんもここに来るの？」
フウくん　「ううん、ぼくたちの病気とは違うんだ。おばあちゃん、死んじゃうかもしれないんだ」
ノア　「フウくん」
セン　「おばあちゃん、死んじゃうの？」
フウくん　「分かんないよお」

看護婦が登場。

看護婦　「あら、ちょっとどうしたの」
ノア　「ねえ、フウくんの病気まだ治らないの？　まだここから出られないの？」
看護婦　「そうね」
フウくん　「帰りたいよお。会いたいよお」
セン　「フウ」
看護婦　「そうよね」
先生　「どうかしたのか？」
看護婦　「あ、先生。フウくんが」
セン　「先生。フウ、いつ治るの？　いつおばあちゃんに会えるの？」
先生　「うん……まだ、もう少し」
フウくん　「もうすぐで治るって、言ったじゃん。ぼく、帰りたいよ。おばあちゃん、死んじゃうかもしれないんだよ」
先生　「そうだね。仕方がない、今週までには退院できるようにしてみよう」
看護婦　「先生」
先生　「フウ、1週間待ってくれたら、退院できるようにするからね。待てるかな？」
フウくん　「うん。本当に？」
先生　「本当だよ」
ノア　「良かったね、フウくん」
フウくん　「うん。ありがとう先生」
先生　「(看護婦に)明日詳しく打ち合わせをしよう。セン、今から治療だから先生とおいで」
セン　「はい」
先生　「(看護婦に)それじゃあ任せたよ」
看護婦　「フウくん、行きましょ」
フウくん　「うん。セン、治療頑張ってね」
セン　「うん。いってくる」
ノア　「いってらっしゃい」

先生とセン、看護婦はフウくんとノアを連れて、それぞれ反対側に退場。
先生とセンはすぐに舞台へ戻ってくる。
診察室。ベッドや机などがある。

先生　「皆とは仲良くしてる？」

セン　「はい。楽しいです」
先生　「それは良かった。何も不便なことはないね？」
セン　「はい」
先生　「うん。じゃあ、ここに来て何か、嫌なことは？」
セン　「ないと思います」
先生　「そうかそうか。じゃあ、お父さんにしたことを、誰かにしたいと思ったことはないね？」
セン　「はい。あ、でも」
先生　「でも？」
セン　「ゲジゲジ」
先生　「虫の？」
セン　「はい。気持ち悪いって思いました」
先生　「思って、どうしたの？」
セン　「動かなくしました」
先生　「殺したってこと？」
セン　「はい」
先生　「そうか」

先生、カルテに何かを書き込む。

先生　「ねえセン。先生は、どこをどうしたら動かなくなると思う？」
セン　「そのペンで、そこを刺したら」
先生　「そうだね。ううん、難しいな。セン、キミの病気はね、かなり難しいんだよ」
セン　「難しい」
先生　「きみは、生き物の、どこをどうしたらどうなるってことを、非常によく分かっている。いや、よく分かってしまうんだ」
セン　「はい」
（※）
先生　「でもねセン、人を動かなくするというのはね、いけないことなんだよ。分かるかな？」
セン　「はい」
先生　「嫌なことがあっても、すぐに手を出しちゃいけない。それでねセン、今から先生も、センのお父さんと同じことをしてみようと思うんだ」
セン　「え？」
先生　「治療の一環なんだよ。嫌でも我慢できるかな？」

先生、センをベッドに座らせ、服をまさぐり太ももやら肌に触れる。
セン、嫌な顔をしている。
先生、興奮しているのか息がやや荒い。
先生、センの唇にキスしようとする。

セン　「いや」

セン、先生の白衣の胸ポケットからボールペンを取り出す。
ためらうことなく喉へ突き刺そうとする。
先生、センの腕を掴みそれを止める。

先生　「我慢出来なかった？」
セン　「うん」
先生　「そうかそうか、今日はもう止めておこう。嫌な思いをさせてしまったけど、これも治療だからね、セン」
セン　「はい」
先生　「怖かっただろう。ごめんね」
セン　「(頷く)」

先生、刺されそうになった首筋をさすりながら。

先生　「ううん(と唸る)」
セン　「あの、ごめんなさい」
先生　「いや、ゆっくり治していこう。ただ、(※)うん、この才能ばかりは、治療がね」
セン　「治らないんですか？」
先生　「いいや、先生がどうにかしてみせるさ」
セン　「はい」
先生　「大丈夫、センを治すために先生がいるんだよ」
セン　「はい、でも、先生」
先生　「ん？」
セン　「私、フウの病気が好きです。フウも、シキの病気が好きだって」

セン　「分かんない」
先生　「セン、病気を治して、早く家に帰りたいだろう？　やってみようね、我慢するんだよ」

先生　「うん」
セン　「どうして病気はいけないの？」
先生　「普通じゃないからだよ」
セン　「普通じゃないから……」
先生　「授業で毎日言ってるだろう。天才とは病気である」
セン　「才能とは、病魔である」
先生　「そう、良い子だね。キミたちは病気だ。だけど何も心配しなくて良い、フウだって1週間後には、おばあちゃんに会えてるからね」
セン　「うん」
先生　「何か困ったことがあれば言いなさい。先生はいつだってセンの味方だからね」
セン　「はい」
先生　「良い子だ」
看護婦　「先生」
先生　「フウは？」
看護婦　「今は落ち着いています。あの、それよりノアちゃんが」
先生　「ノア？」
看護婦　「ええ、ついさっき、また勝手に数式を作って」
先生　「ダメだな、病気が進行してる。セン、今日はもうお戻り。（看護婦に）ノアを連れてきてくれ」
看護婦　「はい」

看護婦、退場。

セン　「ノアは大丈夫なの？」
先生　「ああ。ノアもね、センと同じく治療が難しいんだ。教科書で習っただろう、シュリニヴァーサと同じ病気でね。だけど大丈夫だよ」
セン　「うん……。さようなら」
先生　「うん」

7　病院（数日後）
明かりがつく。
チャイムが鳴る。
メカとノア登場。

ノア　「シキちゃーん」

シキちゃん声「うん。すぐ行くー」
メカ　「中庭だからなー」
シキちゃん声「わかってる」
メカ　「行こうぜ」

メカとノア退場。
シキちゃんが2人を追いかけるように舞台を駆け抜ける。
フウくんとセン登場。

セン　「明後日に帰るの？」
フウくん　「うん。それで今からね、手術があるんだって」
セン　「痛いの？」
フウくん　「ううん、そんなことないよ。麻酔もしてくれるんだ」
セン　「麻酔……」
フウくん　「痛いとか冷たいとか、そういう感覚が無くなるんだって」
セン　「すごいんだね」
フウくん　「うん。ちょっと怖いけど、大丈夫だって先生が言ってた」
セン　「そっか。フウは、もういなくなるんだね」
フウくん　「うん。寂しい？」
セン　「うん」
フウくん　「え。へへ……そっか」
セン　「フウの病気が治るのも、悲しい」
フウくん　「……うん」
セン　「ねえ、治る前に、こっそり聞かせて」
フウくん　「うん、ナイショだよ」
セン　「ナイショにする」
フウくん　「それじゃあ、この椅子」
セン　「うん」
フウくん　「この椅子には、悲しい物語があるのです。昔、この椅子には、1人の美しい娘が座っておりました。娘はずっとずっと、座っておりました。娘は、とある男を待っていたのです。娘には親に決められた婚約者がおりました。しかし、娘は愛する男と一緒になるため、その婚約者を殺してしまったのです。罪はすぐにばれ、娘は牢獄に入れられました。娘の愛した男は言いました、ぼくと一緒になるため、君がこのような過ちを犯してしまうとは。それでもぼくは君を愛している、毎日君に会いに来よう。そして君がここを出たら一緒になろうと。娘はとても喜びました。男は約束通り毎

日会いに行きましたが、そのうちだんだん、姿を見せなくなりました。忙しいだけだと娘は自分に言い聞かせ、いつまでも牢獄のなかの、この椅子に座って待ち続けました……ほら、ここに、涙のあとがある」

セン　「ねえ、その娘は最後どうなったの？」

フウくん　「牢獄から出て男と結婚。ぼく、あんまり悲しい結末は好きじゃないから」

セン　「じゃあ、男が会いに来なかった理由は？」

フウくん　「う〜ん。それじゃあ、娘と結婚するためにたくさんお金が必要で、それでたくさん働いてたから、とか」

セン　「フフフ」

フウくん　「ダメ？」

セン　「ううん。楽しい」

フウくん　「フフフ」

セン、椅子に座る。

フウくん　「アハハ、セン、婚約者を殺した娘みたい」

セン　「ううん。私が殺したのはお父さんだから」

フウくん　「え、そうなの？　セン、お父さん殺したの？」

セン　「うん。動かなくしちゃったの」

フウくん　「どうして？　嫌いだったの？」

セン　「ううん……気持ち悪かったから。私のいろんなところを、触ってくるの」

フウくん　「そっか。でも、殺すっていうのは悲しいことなんだよ」

セン　「うん。母さんも、そう言ってた」

フウくん　「ねえ、センは、ぼくと会えなくなったら悲しい？」

セン　「うん」

フウくん　「ぼくの病気が治ったら悲しい？」

セン　「うん。フウの病気、好きだから……」

フウくん　「ぼくもね、センが好きだよ。だから、センが死んだら……動かなくなったら悲しいな」

セン　「うん」

フウくん　「ね？　誰かが死んだら、誰かが悲しむんだよ。娘が殺した婚約者だって、その婚約者のお父さんもお母さんも、友達だってすごく悲しんだはずなんだ」

セン　「うん。もう誰も殺さないよ」

フウくん　「うん。約束ね」

セン　「うん」

看護婦と先生登場。

看護婦　「フウくん」
フウくん　「うん。セン、それじゃあ」
先生　「(センに)向こうでノア達が遊んでいたよ。混ざっておいで」
セン　「はい。フウ、頑張ってね」
フウくん　「ありがとう」

フウくん、先生と看護婦に連れられて退場。
センも退場。
間。
メカたち、登場。
みんなで電車ごっこをしている。

メカ　「そっかあ。明後日かあ」
ノア　「いいなあ。私もはやく帰りたいなあ」
シキちゃん　「でも、寂しくなるね」
セン　「シキも、やっぱり寂しいの？」
シキちゃん　「当たり前だよお。私が来たときから、ずっといるんだもん」
メカ　「え～、噴水前にとぉーちゃあくでござぁまぁっす」
3人　「ぷしゅー」
メカ　「降りられる方は～？」
3人　「いませえん」
メカ　「はい。あ出発進行～」
3人　「がたんごとん、がたんごとん」
メカ　「オレもはやく帰りたいなあ」
ノア　「みんなそうだよお」
セン　「私も、ちょっとだけお母さんに会いたいな」
メカ　「ちょっとだけなんだ」
シキちゃん　「私ね、手術をすれば、帰れるよって言われたの」
ノア　「えっ、そうなの？」
シキちゃん　「うん」
セン　「嬉しくないの？」
メカ　「おいおい、贅沢だなあ」
シキちゃん　「あのね……私の病気、難しいんだって。私、どうしても、絵を描いちゃうの。病気の絵なの」

ノア　「うん」
シキちゃん　「私ね、嫌なこととか、楽しいこととか、たくさんね、絵にするの。指がね、勝手に動くの。すごく楽しいけど、病気だからダメなの」
メカ　「オレは、シキの絵好きだよ」
シキちゃん　「うん。私も私の絵が好きなの。上手く描けても下手くそでも、全部好きなの。でもね、病気だからね、治さなくちゃいけないの。でもね、治らないの。だからね、描けなくなったら、退院できるよって先生が」
セン　「描けなくなったら？」
シキちゃん　「右手をね、切れば良いよって。ちょっとだけ不便になるけど、痛くはしないから大丈夫だよって。私ね、退院したいのか、よく分かんなくなっちゃったよお」
ノア　「シキちゃん」
メカ　「お、おい、泣くなよ、大丈夫だから」
シキちゃん　「やだよお」
セン　「シキ」
ノア　「ねえ、どうして、病気はダメなんだろう」
セン　「分からない。私、みんなの病気好きだよ」
メカ　「オレも……」

シキちゃんの泣き声を残しながら暗転。

8　病院(数日後)

明かりがつく。

セン、椅子に座っている。

看護婦登場。

看護婦　「センちゃん」
セン　「フウは？」
看護婦　「もうすぐ来るわ。今荷物を纏めているから」
セン　「うん」
看護婦　「センちゃんはフウくんととても仲良しだったから、寂しくなるわね」
セン　「うん」
シキちゃん　「センちゃん」
看護婦　「シキちゃん」
シキちゃん　「フウくんは？」
看護婦　「今荷物を纏めているから、もうすぐよ」

シキちゃん　「そっか……」

メカ、ノア登場。

メカ　「フウは？」
シキちゃん　「もうすぐだって」
看護婦　「みんな見送りに来てくれたのね。フウくんもきっと喜ぶわ」
ノア　「へへ……」
看護婦　「フウくんね、喋れないけれど、みんな分かってあげてね」
メカ　「え……？」

先生が荷物を持ったフウくんを連れて登場。
フウくん、口を縫い付けられている。
先生、微笑んでフウくんの肩に手を置いている。

先生　「みんな、見送りに来てくれたんだね。なあ。フウ、嬉しいね」
フウくん　「(頷く)」
セン　「フウ」
フウくん　「(微笑もうとするが糸が邪魔で難しい)」
メカ　「おい、先生。これって」
看護婦　「こら、先生に向かっておいなんて言っちゃダメじゃないの」
先生　「メカ、言葉使いは大事だからね」
ノア　「先生、フウくんの口どうしたの？」
先生　「(フウくんに)痛みはないね？(ノアらに)フウの病気はね、難しいんだ。だから、今すぐ退院するとなると、これが一番なんだよ」
セン　「でも、これじゃ、喋れない……」
先生　「少し不便だろうが、すぐに慣れるさ。何も心配いらないよ。ただ、これは応急措置だからね……フウの病気は、本当はもっと難しくて……」
シキちゃん　「そんな」
看護婦　「退院してからも定期的に通ってもらうから、みんなあんまり落ち込まないで。ね？　フウくんも」
フウくん　「(頷く)」
先生　「さ、行こうか。お婆様の病院まで送ってあげるからね」
フウくん　「(頷いてから看護婦と先生についていこうとする)」
セン　「フウ」

フウ、振り返りセンを見る。

セン　「私、フウの病気好きだよ」

看護婦　「まあ、センちゃん」

先生　「セン、あまり滅多なことを言ってはダメだよ」

先生、看護婦、フウ退場。

沈黙。

セン　「ねえ、病気って、そんなにダメなことなのかな」

ノア　「分かんない」

セン　「どうして天才って、病気なのかな」

メカ　「分かんねえよ」

シキちゃん　「私たち、本当に病気なのかな」

沈黙。

セン　「私たちは、病気じゃない」

メカ　「え……」

セン　「才能は、病魔じゃない！」

ノア　「センちゃん」

セン、駆け足で退場。

シキちゃん　「センちゃん」

3人退場。

9　病院(数時間後)

先生、電話をしながら登場。

先生　「ええ、子供をひとり。はい、男の子です。問題ありません、彼の祖母が亡くなれば、すぐに戻します。はい、ええ。監視はもちろん。あの独創性はかなり危険ですから。……(電波の調子が悪くなり)もしもし？　変だな」

先生、携帯を耳から離す。

そこにフォークを持ったセンが登場。

先生　「セン。フウを送ってきたよ。お婆様に会えて、幸せそうだった」
セン　「先生」
先生　「どうしたんだい？」
セン　「私たちは、なぜ病気なの？」
先生　「変なことを聞くね。仕方ないんだよ、病気っていうのはね、なりたくてなるものじゃないんだ。かわいそうに、キミたちは偶然なってしまっただけなんだ。でも大丈夫、セン、キミのために先生がいるんだよ」
セン　「天才は病気じゃない」

先生、センの持っているフォークに気がつく。

先生　「食事の時間にはまだ早いよ、セン」
セン　「才能は病魔じゃない」
先生　「いいや。セン、お前たちは病気なんだよ。でも大丈夫、先生がちゃんと治してあげるさ」
セン　「私も、ここにいる皆も、誰も病人なんかじゃない」
先生　「集中治療室に入れるべきかな」

先生、センへと手を伸ばす。
セン、避けて先生を床に転がす。

先生　「何のマネだ」
セン　「天才は病気じゃない。その才能を恐れてはならない」

セン、カセットを先生の前に転がす。

先生　「セン、あの廃屋に行ったね？　どこから抜け出したのかな。怒らないから言ってご覧」
セン　「フウのお話もシキの絵も、なくなったら悲しい。どうして才能はダメなの？　どうして病気なの？」
先生　「センはおかしなことを言うんだなあ。理由なんてないんだよ。お前らは病気だ。全員どうしようもない病人なんだよ」

先生、ポケットに手を突っ込み何かを押す動作。何度か繰り返す。

先生　「くそっ、何故来ない」
メカ声　「先生、ごめん。でもオレたち」
先生　「メカ。メカ、お前今どこにいる」
セン　「管理室。おまわりさんへの連絡はできないよ先生」
先生　「メカ。いい子だ、その部屋はねえ、メカきみの病気には合わない部屋だからねえ。それ以上は何も触らないように、今すぐ管理室から出ておいで。シキ、ノア、誰かいないのか。センの悪ふざけに付き合っちゃいけないよ」
セン　「みんな管理室にいる」
先生　「なに……？」
セン　「先生が優しくないって、みんな見てるんだよ」
先生　「ハハ、ハハハ。おい看護師！　役立たずめ何してる！」
セン　「来ない」
先生　「くそ、ははは、殺したのかセン。さすがだよアイツはプロだぞ。同じようにオレも殺すか。お前にはなあ、殺せてしまうんだよなあセン。お前は病気だ。お前だけは間違いなく病気だよ」
セン　「……確かに私は病気かもしれない。でも、みんなは違う。みんなの病気は絶対に、悪いものじゃない！」
先生　「みんな病気さ。国がそうした。国がそう決めたんだ」
セン　「誰にも決めさせない。私たちが決めるんだよ」

シキちゃんが布に描いたシンボルマークが吊るされ登場。

セン　「ここが今から国になる。天才のための、天才の国にしてみせる」
先生　「調子に乗るなよ病人風情が」
セン　「はじめるわ。ここから全て」

舞台、睨み合う先生とセンを残して。

終